

節句幟の研究 —歴史の変遷と手染め工程—

Research on *sekku nobori* (banners for seasonal festivals) : historical shifts and hand dyeing process

上 田 信 道^{*}
UEDA Nobumichi

要 旨：

本稿では、節句幟の歴史の変遷と、手描き本染めの手法による節句幟の製造工程について論じる。端午の節句に節句幟を掲げる風習は、関西地域を除く全国で広く定着し、いまでも盛んである。江戸時代に始まった伝統的な風習であるが、新しい生活様式に対応した製品が次々と産み出しされ、日々進化をとげている。

Abstract

This paper discusses historical shifts regarding *sekku nobori* (banners for seasonal festivals), and the manufacturing process of *sekku nobori*, which is based on a technique called *tegaki honzome* (hand painting and hand dyeing). The custom of putting up *sekku nobori* for the Boys Day Festival has become widely established across Japan with the exception of the Kansai region, and is still thriving. This is a traditional custom that started in the Edo period, and related products that are adapted to new lifestyles have been created one after another and have been evolving on a constant basis.

キーワード：節句幟、歴史の変遷、手染め工程

Keyword : *Sekku nobori* (banners for seasonal festivals), historical shifts, hand dyeing process

1. はじめに

手描き本染め（以下、「手染め」という）の手法による節句幟や鯉幟の製造は、岡崎の伝統的な地場産業の一つである。本稿では、拙著「鯉幟の変遷に関する考察—明治20～30年代の児童雑誌を中心に—」⁽¹⁾「岡崎における手染め鯉幟の研究」⁽²⁾に続き、節句幟の歴史の変遷と、手染め節句幟（節句幟は「幟飾り」ともいう）の製造工程について論じる。

ちなみに、『日本人形玩具辞典』⁽³⁾の「幟飾り」の項によれば、これは「五月の節句飾りとして用いる幟類。幟は、細長い旗の横にたくさんの乳を付けたもので、南北朝時代から軍旗の一種として

武家の間に用いられたが、江戸時代初期から端午の節句の外飾りとして、これを模したものを屋外に立て並べ、男の子の健康、出世を祝い願うようになった」ものだという。

なお、現代では端午の節句に屋外へ揚げたり屋内に飾ったりする多種多様な幟のことを一括して「武者絵幟」と呼称することがままある。これは多くの絵柄が豊臣秀吉・加藤清正・上杉謙信・武田信玄・武内宿禰（野見宿禰）などの武士・武人を題材にしているからである。しかし、実際の幟には鍾馗・龍虎・鯉の滝登り・桃太郎・金太郎など多様な絵柄が存する。このように、元来が「武者絵幟」とは〈武者絵の幟〉の意であるから、多

^{*}岡崎女子大学子ども教育学部

種多様な幟を一括して「武者絵幟」と呼称することには違和感を覚える。

そこで、本稿でいう「武者絵幟」は〈武者絵の幟〉の意に限定し、端午の節句に用いられる幟全般については「節句幟」と呼称することにしたい。

2. 節句幟の歴史の変遷

江戸幕府では、人日（旧暦1月7日）、上巳（旧暦3月3日）、端午（旧暦5月5日）、七夕（旧暦7月7日）、重陽（旧暦9月9日）の節句を〈五節句〉として、式日（祝日）に定めていた。

このうち、端午の節句のことを菖蒲の節句ともいうのは、「しょうぶ」の音が「尚武」または「勝負」につながるからだ、といわれている。武家では男児の立身出世と元気な育ちを祈念して、屋外（門外）には菖蒲の葉などで作った菖蒲兜を飾り、虫干しを兼ねて旗幟（または幟旗）、吹き流し（または吹貫）、毛槍の類を立て並べた。屋内（座敷）には先祖伝来の武具のほか、小型の幟の類を飾った。このとき、鯉幟と一緒に立て並べた節句幟には、魔除けの意味を込めて、鍾馗や和漢の武将などの絵柄が用いられている。

ただ、旗幟の類は本来が戦に用いる道具であるから、これを屋外に立て並べることができるのは武士の身分の者に限られる。いかに裕福であっても、町人には立てられない。また、江戸在府中の諸大名の家臣も、旗本に遠慮して、屋内にのみ座敷用の幟を飾り、屋外には立てなかった。御抱席と呼ばれる下位の幕臣も同様であった。（「鯉幟の変遷に関する考察—明治20～30年代の児童雑誌を中心に—」⁽⁴⁾ 参照）

そこで、諸大名の家臣や下位の幕臣や町民が屋外に立て並べることができたのは、節句幟や鯉幟に限られていた。

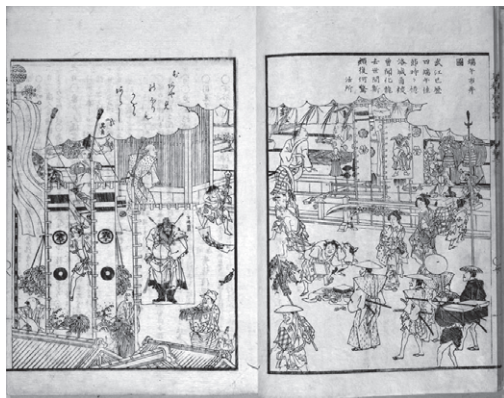


図1（画像提供：東京国立博物館）

「図1」は天保年間に上梓された斎藤月岑『東都歳時記』⁽⁵⁾のうち、「端午市井図」である。この絵を見ると、この頃の武家屋敷と町家の節句飾りの飾り方の違いがよくわかる。

まず、左頁の家屋について。門構えからみて、これは上級武士の屋敷であろう。門前には一対（2本）の旗幟と1本の節句幟が揚げられている。節句幟の絵柄は、魔除けの鍾馗であり、この幟のように幅が広くて丈の短い幟のことを四半旗という。これらは一括して「外幟」と呼ばれた。

なお、旗幟の先端に付けられた飾りを「ダシ」、上部の横木に付けられた小型の旗を「小旗」または「マネキ」という。

他に、屋根の上には、毛槍の先端が覗いている。左端に見える母衣は、元来は背面からの矢を防ぐために背負う用具であったが、後には実用性を失って飾り物になったものである。母衣の背後には、鯉幟も見て取れる。

次に、右頁の家屋について。通りに面して暖簾を掛けていることからみて、これは商家の店頭であろう。ここに見える小ぶりの幟は座敷用の幟で、これを「内幟」または「座敷幟」という。他に、千成り瓢箪の馬印、鎧兜を模した飾り物、鍾馗や鎧武者の人形が飾られている。これらは座敷飾りと呼ばれた。ほかに、巨大な刀は菖蒲刀と呼ばれた飾り用の木刀である。屋根瓦の間には魔除けのために菖蒲の葉が差し込まれているが、これは魔除けのために武士・町人の別なく広く行われた習慣である。



図2（国立国会図書館蔵）

「図2」は明治期に上梓された菊池貴一郎『江戸府内絵本風俗往来』⁽⁶⁾のうち、「幕府旗下の士端午嘉儀を述ぶる往来の姿」である。中央に描かれた武士が訪ねる屋敷は、門構えからして、さほど高位の武士の屋敷とは思えない。先述のとおり、直参であっても低い身分の武士の屋敷では、門前または屋外に旗幟を揚げることはできないので、堀の内に鍾馗の絵柄の節句幟を一本掲げているばかりである。

ところで、江戸時代初期の頃の節句幟には和紙製のものが多かったようだ。後述するように、布製の節句幟が一般化するのには、ずっと後の時代のことである。和紙製の節句幟の絵柄は手描きされたほか、木版の技術を用いて作成されたものもあった。

節句幟が和紙製であったことについては、天保年間に著された喜多村筠庭『嬉遊笑覧』⁽⁷⁾に、次の記述がある。

○絵のぼり、^{かところ}『懐子』三、「五月幟、門やまた立栄ゆべき紙のぼり 正村」。^{そのほか}其外紙のぼりといふ句多きは、寛永頃、端午のぼり皆紙にてありし也。『羅山文集』、「慶安辛卯五月端午云々。家々蒲ヲ挿シ粽ヲ造り、且ツ童子ノ為に紙幡木會ヲ立つ」。また、『一代女』六、五月の処、「のぼりは紙をつぎて素人絵をたのみ云々」。『五元集拾遺』、「なよ竹の末葉のこして紙のぼり」。今も田舎には紙のぼりを^{たてる}立 古風残れり。武者絵の板すりて、蘇枋・^{キシル}黄汁等にて彩る。江戸にても鍾馗のぼりは紙^{もちう}を用るもあれど、それも此ころは少なき也。板行の絵などは絶たり。奥村文角が墨絵などの鍾馗を板本にて摺、目玉に金箔押たるなどありし（古板すること今もなきにはあらず。そは皆田舎へ売のみなり）。『続山井』、「絵にかくや目に見ゆる鬼かみのぼり 風鈴軒」。又『五元集』に、「卯月十七日、或人の愛子にねだり申されて、郭公のぼり染よとすゝめけり」といふ句も見えたれば、其頃より下ざまにも布の幟行はれしこと知るべし。また、『伊呂三線』に、手遊びの紙画のぼりを^{うる}売ことあり（今の端午のぼり、座敷に立る小幟はいと近きもの也。^{きさんじ}喜三二が^{ながいきミタイキ}『長生見度記』に「やがて端午幟を座敷に立べし」といへる）。

引用文中の『懐子』は江戸時代初期に上梓された俳諧集で、松江重頼の編。万治3（1660）年の跋があるから、寛永年間から万治年間の頃（西暦1600年代前半）には和紙製の節句幟が一般的であったことがわかる。また、『羅山文集』（林羅山）中の記述にある「慶安辛卯」は慶安4年で、これを西暦でいうと1651年にあたる。前掲の『日本人形玩具辞典』によれば、節句幟の風習は寛永初年ごろから始まったというが、こうした記述と符合する。

『一代女』は井原西鶴の『好色一代女』のことで、1686（貞享）3年の刊行であるから、この頃であってもまだ節句幟は和紙製であった。

一方、『五元集』は江戸中期に上梓された俳諧集で、榎本其角の自撰、小栗皆原の編。刊行は延享4（1747）年であるから、延享年間の頃（西暦1700年代前半）には庶民の間でも布製の節句幟が一般化していたことになる。前掲の『日本人形玩具辞典』によると、布の材料は木綿または絹であった。また、『嬉遊笑覧』の著された天保年間の頃（1800年代前半）の江戸では和紙製の節句幟が姿を消しつつあり、田舎に残る古い風習として認識されていたことがわかる。

さらに、『長生見度記』は朋誠堂喜三二の黄表紙本である。1783（天明3）年に蔦屋から刊行されているから、この頃にはまだ座敷幟が一般化していなかったことがわかる。

なお、「蘇枋」とはスオウノキを原料にした染料のことで、和紙を紫がかった赤色に染め上げるために用いた。「黄汁」とはベニバナを原料にした染料のことで、和紙を黄色に染め上げるために用いた。



図3（画像提供：東京国立博物館）

「図3」は歌川広重の筆になる浮世絵「水道橋駿河台（水道橋より駿河台を臨む）」（原本多色刷）⁽⁸⁾である。およそあり得ない大きさの鯉幟は、いかにも広重らしいデフォルメだが、これについては拙著「鯉幟の変遷に関する考察—明治20～30年代の児童雑誌を中心に—」をご覧いただきたい。ここでは遠景に描かれている旗幟や節句幟の類いに注目したい。

第一に、旗幟と節句のぼりがセットにして立て並べられている。こうした飾り方が当時の風習であったことが分かる。

第二に、江戸時代には、水道橋を挟んで手前にあたる神田は町家が、神田川の向こう岸の駿河台には武家屋敷が建ち並んでいた。広重の絵柄からは、武家地の駿河台では鯉幟よりも旗幟や節句幟を立てることの方が盛んだった、ということが見て取れる。

第三に、こうした幟旗や吹き流しの類には、竿頭に飾りを取り付けることが慣わしであった。いまでも神社の祭礼で幟旗を立てる際、竿頭に松や杉の枝を取り付けることがある。折口信夫「髯籠の話」⁽⁹⁾によれば、このような飾りを「ダシ」という。「ダシ」は「出し」の意で、元来は招き寄せられた神霊が宿る依代であった。出しの巨大化したものが、祭りで曳き廻す山車なのだ、ともいう。たびたび引用する『日本人形玩具辞典』によれば、ダシには「細い竹に藁を束ねたもの」や籠玉（竹で編んだ籠状の飾り）などを用いたようだ。現代ではほとんどの場合、回転球を取り付ける。これもまたダシの一種かと思われる。



図4（国立国会図書館蔵）

「図4」（原本多色刷）と「図5」（原本多色刷）は浮世絵「子宝五節遊」のうち、端午の節句を描いたもの。絵師は鳥居清長⁽¹⁰⁾であるから、天明年間から文化年間にかけての頃（西暦1700年代末～1800年代初め）の作であろうか。

「図4」の節句幟は、左から鶴亀をあしらった「高砂」、犬猿雉を従えた「桃太郎」の絵柄である。右上の子どもが持つ小型の鯉幟は、今の鯉幟の起源とされている。右下の子どもは、菖蒲の葉を編み込んだ遊具を地面に打ち付けている。これは「菖蒲打ち」という遊びである。



図5（国立国会図書館蔵）

「図5」に見える左端の幟は魔除けの「鍾馗」の四半旗で、その右の2本の幟はお目出度い「宝尽くし」の絵柄である。隠れ笠、宝巻（神仏の奥義を書いた巻物）、隠れ蓑、金囊（宝袋）、宝珠、宝鍵（宝蔵倉の鍵）、打ち出の小槌などが見て取れる。この3本の節句幟の前で遊ぶ5人の子どもたちは大名行列の真似事に興じている。右上の子どもは春駒に乗って馬上の武士を真似る。下3人の子どもは、右から節句飾りの菖蒲刀、毛槍、偃月刀を持っている。偃月刀を担ぐ仕草は、関羽のつもりであろうか。

「図6」は桜川杜芳『年中故事附録』中の挿絵である。絵師は北尾政美で、「図4」「図5」とほぼ同時期の刊行と思われる。何れも外幟が題材である。

なお、「図4」と「図5」では家屋が省略されているため詳細は不明だが、「図6」を見ると、これらの節句幟は裕福な商家の店先に立て並べられていることが窺える。その立て方も詳細にわかる。むろん、商家であるから武家屋敷とは違って、旗幟の類は見当たらない。

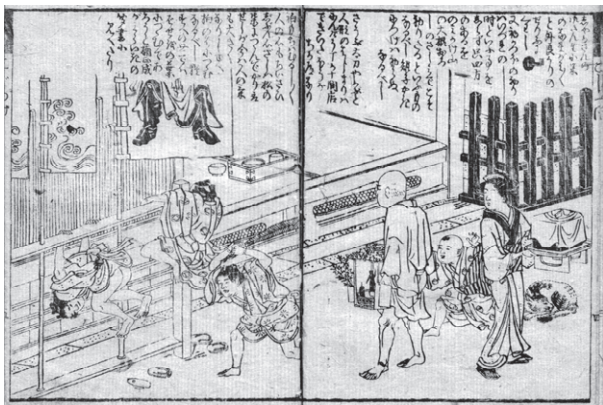


図6 (国立国会図書館蔵)

「図7」は、享和年間(1803年)に刊行された黄表紙で、山東京伝『裡家算見通坐敷』⁽¹¹⁾の中の挿絵。絵師は北尾重政で、座敷には3本の内幟が飾られている。見てわかるとおり、内幟も外幟も立て並べ方は同じである。なお、竿頭にはダシが見え隠れしている。横木に取り付けられた小型の幟は「招き」と呼ばれている。



図7 (国立国会図書館蔵)



図8 (国立国会図書館蔵)

「図8」は、寛政年間(1791年)に刊行された黄表紙で、桜川慈悲成『馬鹿長命子気物語』⁽¹²⁾の中の挿絵である。絵師は初代の歌川豊国で、この座敷にもまた内幟や菖蒲刀と鉾が飾られている。ちなみに、3人の女性のうち、右端の女性が拵えているのは柏餅である。寛政年間の頃には、端午の節句に柏餅を食する風習が一般化していたことがわかる。

このように、江戸時代には端午の節句に節句幟や鯉幟を揚げるが大いに流行し、京・大阪・江戸の三都には幟市が立った。殊に、江戸では日本橋十軒店の幟市が盛んで、上巳の節句の雛飾を売ったあとは、いっせいに幟市に変わったという。喜多川守貞『守貞謄稿』⁽¹³⁾には、「京師ハ四条大坂ハ御堂ノ前江戸ハ十軒店尾張町麴町ニテ之ヲ売ル江戸ハ四月二十五日ヨリ中店ヲ構ヘ又他売ノ店ヲモ幟市トスル」云々と、幟市の賑わいぶりが記されている。

3. 手染め節句幟の製造

手染め節句幟の製造については、岡崎の節句幟・鯉幟のメーカー「ワタナベ鯉のぼり」のご協力をいただいた。同社の工場で実地に取材し、写真撮影と本稿への掲載の許諾も得ている。

工場の所在地は「岡崎市福岡町西後田10-3」で、案内は同社社長の渡辺要一氏にお願いした。見学日は2016(平28)年11月23日である。同社の沿革などについては、拙著「岡崎における手染め

鯉織の研究」をご観いただきたい。

なお、同社では春から晩秋（夏季を除く）にかけて節句織の染色を、夏季には鯉織の染色を行っている。それは、鯉織の鱗の部分に同社の製品の特徴である「ぼかし」の部分が多いからである。ぼかしを綺麗に仕上げるためには、短時間で天日干しの工程を終える必要がある。夏季は気温が高く強い日照があるので、天日干しには最適の季節になる。

これに比して、節句織にはぼかしの部分が少ない。絵柄も鯉のほりほど繊細ではない。繊細な部分があっても、仕上げの工程で染め上げられる。また、織の受注は2～4月の期間が最も多い。このとき、注文を受けてから染色しては、とても間に合わない。そこで、あらかじめ受注数を予測し、染色と縫製を終えておく。そのため、同社では夏季を除く春から晩秋にかけて染色の業務に集中している。

節句織の生地には、上質の綿布または綿と化繊の混紡の布を用いる。

染色の工程については、ほぼ鯉織と同じ（「岡崎における手染め鯉織の研究」参照）である。そこで、あらためて鯉織の染色の手順について概略を記しておく、

- ① 糊（防染材）を用いて線画を描く
- ② 天日に干す
- ③ 刷毛を用いて着色する
- ④ 天日に干す
- ⑤ 水槽につけて糊を洗い流す
- ⑥ 天日に干す

のようになる。ただ、節句織の場合には、もう少し複雑な工程になっている。

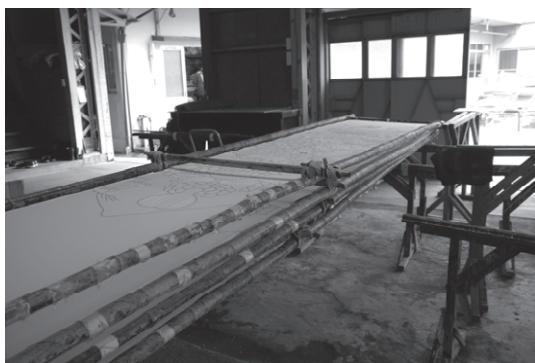


写真1 筒引きの工程を終えた布

まず、①について。この工程における作業の方法を「筒引き」という。写真1は筒引きが終了したあと、ハケを用いて染色する工程を待っている状態である。筒引きの工程を終えた布は竹製の枠に糸で縫いつけて引き延ばされ、幾重にも積み重ねられている。



写真2 ハケを用いた染め

次に、写真2は③の工程、すなわちハケを用いて染色を行っているところである。この工程は、鯉織の染色の工程とは大きく違う。

鯉織の場合は布の片面の染色のみを行い、片面の染色が終了した後、鯉の形に裁断し、二枚の布を袋状に縫製する。そのため、裏面は露出しないので染色する必要はない。

ところが、節句織の場合は、構造上、布の両面を染めなければならない。そこで、まず片面を染めた後、天日に干す。その後、もう片面を染め上げる。つまり、実際には①と②、③と④の工程は2度繰り返されることになる。写真3は④の工程で、片面の染色を終えてから天日に干しているところである。



写真3 天日干し

さらに、鯉職の染色との違いは、仕上げの工程の有無である。この工程では細い筆を用いて細かな部分を仕上げる。写真4はベテランの職人が武者絵職に仕上げの筆を振るっているところである。武者の目を描き入れ、髯や髪など細かな部分を仕上げていく。中でも、目の描き入れは重要で、少しでも筆先が狂うと武者の表情が台無しになってしまう。このとき、乾燥にはヘアドライヤーを用いている。

ただ、先述したように武者絵職などの節句職は、客の注文を受けてから、さらに家紋や名前を描き入れる。この作業は、注文のある度に行う。この作業を終えると、ようやく完成品として出荷されるのである。



写真4 仕上げの染め

なお、同社では小型の節句職については、コストを抑えるために機械染めと手染めを併用しているとのことである。

ところで、現在「ワタナベ鯉のぼり」が製造販売している職の種類について記す。

まず、伝統的な武者絵職について。これには、次の種類がある。賤ヶ岳

- ①「太閤・加藤」(豊臣秀吉と加藤清正)
- ②「川中島の合戦」(上杉謙信と武田信玄)
- ③「賤ヶ岳七本槍」(加藤清正・加藤喜明・福島正則・脇坂安治・糟谷武則・片桐且元・平野長泰)
- ④「神功皇后・武内」(神功皇后と武内宿禰)
- ⑤「宇治川の先陣争い」(梶原景季と佐々木高綱)
- ⑥「富士の巻き狩り」(源頼朝と武将衆)
- ⑦「太閤・加藤五人絵」(秀吉・加藤清正・福島正則・脇坂安治・片桐且元)

以上の7種である。中でも、太閤秀吉の入った絵柄が、立身出世を象徴するめでたい職として人気が高い。

また、同社が三河の企業であることから、新しい着想の絵柄として「家康と四天王」(徳川家康と酒井忠次・本多忠勝・榊原康政・井伊直政)を製造している。だが、この製品はあまり人気がないのだという。岡崎は家康生誕の地ではあるものの、家康にはどうしても〈タヌキおやじ〉という悪いイメージがつきまとう。そのため、親の世代に人気がなく、あまり売れないのだということである。

武者絵職以外には、次の種類の職を製造している。

①「吉祥龍虎鷹」

文字通り〈龍〉〈虎〉〈鷹〉の絵柄である。同社の説明によれば「無事成育、長じて世に名を馳せる大きな人物となることの願いが込められた吉祥の図柄」である。

②「金太郎」(坂田公時)

同じく同社の説明によれば「鯉が滝をのぼり龍になったという立身出世の図柄に、元気いっぴいの「金太郎」を組み合せ、男児が雄々しく成長する願いを託した職」である。

渡辺社長によれば、「以前は武将の図柄に人気があったが、現代の親の世代の人たちは、武将の絵柄より吉祥の絵柄や金太郎の絵柄を好む」のだという。

以上の他に、「鍾馗柄小旗」がある。これは、先に見たように江戸時代から続く伝統的な魔除けの絵柄で、いまもなお人気が高い。

また、タペストリーやベランダ用として新しい商品が工夫されている。近年は、上巳の節句(桃の節句)に用いる職が良く売れている。これは女児用の名前に花をあしらった座敷用の内職である。

4. 終わりに

以上、論じてきたように、節句職の風習は端午の節句の伝統を現代に伝えている。ただ、どういうわけか関西地方にはあまり馴染がない。子ども時代を関西で過ごした私は、成人に至るまで節句

幟を屋外に掲げる風習のあることを知らなかった。

それでも、全国的に見ればこの風習は広く定着し、いまも盛んである。同時に、新しい生活様式に対応した製品が次々と産み出され、日々進化をとげている。江戸時代に始まった風習であるが、このように絶え間なく変容し進化し続けることが、その特徴であるといえよう。

注

- (1) 「岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要」第47号 2014年3月 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学
- (2) 「地域協働研究」第1号 2015年3月 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学地域協働推進センター
- (3) 斎藤良輔編著『新装普及版 日本人形玩具辞典』1997(平成9)年 東京堂出版(初版は1968年発行)
- (4) 「岡崎女子大学・短期大学研究紀要」第47号 2014年3月 岡崎女子大学・短期大学
- (5) 斎藤月岑『東都歳時記』1838(天保9)年 須原屋茂兵衛・須原屋八刊
- (6) 菊池貴一郎(芦乃葉散人)『江戸府内絵本風俗往来』1905(明治38)年12月 東陽堂
著者の経歴などは不明。幕末から明治の頃の好事家と思われる。本書は幕末に写生した絵画類を取り纏め出版したもの。
- (7) 喜多村筠庭(信節)『嬉遊笑覧』は江戸時代に成立した稿本で、1830(文政13)年10月付の自序がある。本稿では岩波文庫版(長谷川強ほか編 2002年 岩波書店)から引用した。それは、この版の底本が自筆稿本に拠っており、明治以降に刊行された翻刻本や流布本にない本文校訂を施しているからである。引用文中の漢文は書き下した。
- (8) 歌川広重「江戸名所百景」のうち一枚。安政年間の刊行。
- (9) 『折口信夫全集』第2巻 1995年3月 中央公論社
- (10) 鳥居清長は1752(宝暦2)年～1815(文化12)年、江戸の絵師。
- (11) 山東京伝『裡家算見通坐敷』1803(享和3)年 仙鶴堂
- (12) 桜川慈悲成『馬鹿長命子気物語』1791(寛

政3)年 出版者不明

- (13) 喜多川守貞『守貞謾稿』は1837(天保8)年から30年間に亘って書き続けられた稿本である。本稿における引用は国会図書館蔵の稿本によった。

参考文献

- 斎藤良輔編著『新装普及版 日本人形玩具辞典』1997(平成9)年 東京堂出版(初版は1968年発行)のうち「幟飾り」の項
上田信道「鯉幟の変遷に関する考察－明治20～30年代の児童雑誌を中心に－」(「岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要」第47号 2014年3月 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学)
上田信道「岡崎における手染め鯉幟の研究」(「地域協働研究」第1号 2014年3月 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学地域協働推進センター)